遠山記念館だより

第69号

◇◇館蔵品紹介◇◇

楊文驄「江山孤亭図」

崇禎16年(1643)　絖本墨画
高112.5×横53.2(cm)
重要美術品

遠山記念館で所蔵する「江山孤亭図」は、明王朝の遺臣として清王朝と最後まで戦った楊文驄(号・龍友、1597～1646)の描いた作品である。明王朝末期の官僚であった文驄は、文才と武芸の両方に優れる反面、奔放で享楽的な性格であったとされる。しかし崇禎17年(1644)に明王朝が滅びた後、南京の朱由崧(福王、弘光帝)、次いで福建省の朱聿鍵(唐王、隆武帝)の下で清王朝と戦い続け、最後は敗死した。このため日本では、武士道と重ね合わされて尊ばれるようになる。

文驄の絵画については、南宗画の大家である董其昌が「巨然と恵崇の間に出入す」と賞した逸話が知られる。中でも本作は、落款から死去の2年前の作品と確認できる。絖本と呼ばれる光沢のある絹地に描かれた大幅であり、遠景に山岳を、近景に四阿と木立を配し、その間の余白は大河として現れてくる。特徴となるのは水分の少ない渇筆で描かれた筆使いで、日本の南画には見られない、ある種の超然とした荒々しさを備えている。

本作を彩るのが、所持していた山本梅逸と、箱書をした頼山陽のエピソードである。まず渡辺虹衣『骨董太平記』(太陽出版社、1931)の記述を見てみたい。

> 梅逸は供に此幅を背負はせ友人連に鼻高々と披露する日を胸に描きつゝ三條大橋まで戻つて来た、スルト頼山陽を首め浦上春琴織田海僊等の友人連十数名が威儀を正して出迎へて居たので梅逸は少からず面喰つて了つた、而して山陽に向ひ「僕の如きものを斯く大勢で御出迎へ下さるとは寔に御禮の申上げやうもない」と挨拶を述べた、スルト山陽は「イヤ山本君、君を出迎へたのではない、明の大忠臣楊文驄先生の作品に敬意を表する為出迎へたのだ」といつて得意満面の梅逸をして苦笑せしめた、一同はやがて三條川端の僧房に著し彼の幅を廣間の床に掛けた、此時山陽は第一番に床の前に進み香を焚いて禮拝した(後略)

これ以降も本作に関する劇的なエピソードが続くが、そこには多くの誤解と脚色が含まれている。その実態を探る重要資料が、滑川達(澹如、1868～1936)による巻子本の添状「記楊龍文先生江山孤亭図始末」である。ただしこの添状も、大正期にまとめられた二次資料でしかない。同時代の一次資料となるのが、箱や袋への揮

毫であり、これらを整理することで、その実態がある程度究明可能となる。以下、これらの情報を整理しながら、確認できた来歴について述べていきたい。

本作の付属品の情報で最も古いものが、内箱の底に貼られている貼り紙（図1）である。これは寛政13年（1801）、京都で活動していた南画家である鳥羽石隠（台麓・希聡、1739～1823）が記したものである。

> 楊文驄、以画名於明季。論者與藍田舛並称焉。文驄、墨画山水。蒼秀淋漓、尤落款風韻高古。要非凡庸之以能髣髴也。辛酉長至照鑒石希驄（印）（印）

この貼り紙を根拠にしたのか、滑川は石隠を「江山孤亭図」の所有者としているが、鑑定書風の内容であり、所有していたとまでは断定できない。ただしこの年までに、本作が長崎を通じて輸入されたと見てよいだろう。

滑川は次いで本作が木田海東、中野龍田をへて梅逸が購入したとする。木田海東（生没年不詳）については不詳であるが、美濃国の人物とされる。梅逸の兄弟弟子である中林竹洞（1776～1853）の賛に「舊木田海東所蔵也、余曾臨摹数紙不能得其一班」、すなわち竹洞も海東の下で臨模したとあり、海東所持の情報を疑う必要はない。

次の中野龍田（1756～1811）は、尾張国出身の儒学者である。京都で活動していたが、桑名、岡崎などに移ったとされる。龍田の所有については滑川以外に言及しておらず、確実な証拠はない。後世の記述でも登場しておらず、梅逸は海東から購入したことになっている。

尾張出身の南画家である山本梅逸（1783～1856）が本作を購入したのは、後述する山陽の箱書から天保2年（1831）と見られる。家財を売却して購入したというエピソードが流布しているが、前年に梅逸は名古屋の料亭「酔雪楼」において大規模な書画会を開いていた。実際にはその売上が、購入資金になった可能性がある。

本作を入手した梅逸は、箱蓋表に「楊文驄山水　玉禅室愛玩」の墨書をした（図4左）。「玉禅」は梅逸の号であり、自身の所有を示す。また内箱の木口には小さな貼札（図2）があるが、梅の花の印と「三番」という墨書があり、梅逸の蔵札であった可能性がある。

次いで蓋の裏側に、頼山陽（1780～1832）が着賛した（図4右）。

> 楊龍友翁、明季将帥。與清軍戦不克死。死得其所。可雁行史可法諸人。視諸呉耿輩、不啻麟鳳之與孤梟也。使其遺蹟不佳、猶當什襲愛敬。況其佳如此乎。論者云、龍友下筆、如風雨。蓋其忠義邁往之氣、見筆墨間。是贋手之所不能擬也、梅逸其寶之。
>
> 辛卯九月三日後学頼襄拝観遂題（印）（印）

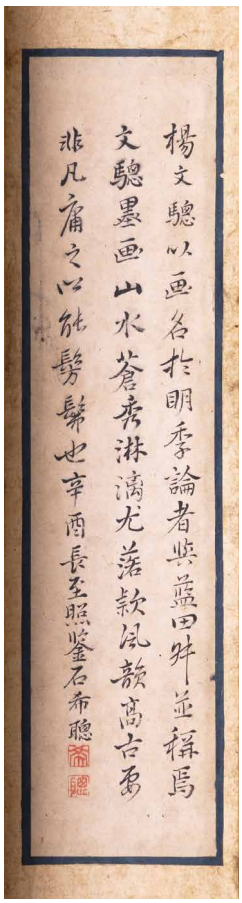


図1　内箱底部貼り紙

図2　内箱木口札

図3　水西荘の書斎である山紫水明処（頼山陽旧跡保存会）

図4　内箱蓋

図5　包袋

日付は同2年9月3日であり、この日に梅逸が京都鴨川西岸にあった山陽の邸宅「水西荘」(図3)を訪問したと見て良いだろう。

先述した竹洞による賛は、本作に付属する板に施されている。この板は内箱とほぼ同じ長さであり、本来は外箱の一部であった可能性がある。「天保癸巳孟春竹洞中林成昌識」とあり、同4年の揮毫であるため、山陽と竹洞の賛には2年の時間的なズレがある。『骨董太平記』のように、山陽らが集団で梅逸を出迎えたわけではなかっただろう。

この時期、山陽周辺には「笑社」と呼ばれる集まりがあり、竹洞を含めそこに参加する文人の多くが本作を閲覧したはずである。竹洞が閲覧した同4年には梅逸の友人である伊豆原麻谷(原迂、1778～1860)も閲覧しており、包袋に着賛している(図5)。これ以降も箱と包袋への着賛は続き、その総数は実に23名に上る。

またこうした閲覧者は、しばしば本作の模本を制作している。坂本箕山『頼山陽大観』(山陽遺跡研究会、1916)には、次の記述があった。

> 越後の人某貫名海屋を訪ひ、三尺巾の絹を携へ、後世子孫の為め訓戒となるべき畫の揮灑を乞ふ、貫名海屋は楊文聰の山水を模寫して與へた

貫名海屋(菘翁、1778～1863)は阿波出身の文人で、当時京都で書画の名手として名を馳せていた。実際に嘉永5年(1852)制作の模本が確認される他、美術雑誌『國華』939号(國華社、1971)にも安政3年(1856)の海屋による模本が紹介されている。この他にも、梅逸の弟子で、婿養子となった山本梅所(1832～1873)が制作した模本の存在も確認される。

梅逸が死去した翌年、安政4年には藤本鉄石(吉備真金、1816～1863)が本作を閲覧している。鉄石は岡山出身の文人で、京都伏見に私塾を開き、尊攘派志士たちと交流していた。鉄石が包袋に施した賛には「安政丁巳復月十四日訪　梅所畫博観其世蔵　楊氏龍友先生遺墨一観」とあり、本作が梅所へと継承されていた事も確認できる。

鉄石は包袋とは別に添状(図6)も揮毫しており、明王朝遺臣として清と戦った文聰への共感を示している。

> 殉国艱難日、游焉静晏時。若人有若畫、吾志復奚疑
> 題山本氏世蔵龍友楊先生山水。時丁巳冬日
> 後学源真金(印)(印)

この6年後の文久3年(1863)8月17日、尊王倒幕の公家と連動した鉄石は、尊皇派の志士を集め大和国で挙兵した(天誅組の変)。しかし翌18日に宮中の攘夷派が失脚し(八月十八日の政変)、孤立無援となった鉄石らは

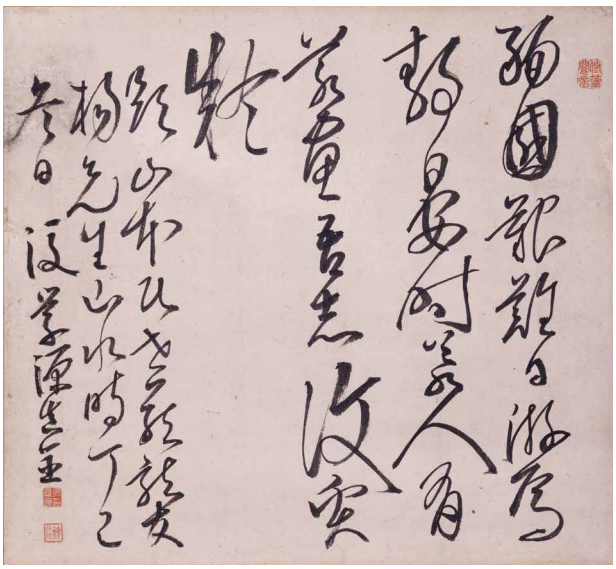


図6　藤本鉄石添状

討ち死にする。そんな鉄石が殉国という言葉を用いて文聰に共鳴している点に、この時期に文聰があがめられた理由が示されている。

この後の包袋への着賛としては、次の岡本黄石(宣迪、1812～1898)によるものが重要となる。

> 此幅於梅逸宅、覽之。今爲南陽片野氏之有。不圖再覽之。忠魂毅魄、所寄、自在筆端。吾輩、尤所敬服。南陽子、其寶愛焉。
> 明治五年壬申九月岡本迪拜觀。

黄石は彦根藩家老であり、また漢詩人としても知られる。その黄石が梅逸の存命時に一度本作を閲覧しており、明治5年(1872)9月にも岐阜で本作を再覧したというのである。この時、所有者は梅所から片野龍蔵(南陽、1841～1882)に移っていた。南陽は安八郡四郷村(岐阜)の豪農で、梅逸の門下生でもあった。この南陽が本作を所持した事実は、次の博覧会事務局からの出品依頼からも確認できる(『東京国立博物館百年史 資料編』)。

> 当五月一日ヨリ聖堂於而書画展観会御開ニ付当管下美濃国安八郡五反郷村片野竜蔵所蔵楊文総(ママ)山水幅差出候様云々御依詫之趣致承知其段同人へ申聞候処右軸破壊ニ依リ此節即取繕中ニ付差出方御猶予被来下度旨別紙之通願出候ニ付左様御承知有之度別紙一通相添此段御報申進候也
> 明治七年四月廿八日　　岐阜県参事小崎利準
> 博覧会事務局　御中

このように同7年の湯島聖堂での書画展のため、岐阜県を通じて南陽に本作の出品が依頼されている。しかしこの時は何らかの破損があり、表具し直していたらしい。

なお『骨董太平記』では土佐藩主の山内豊信(容堂、1827～1872)が本作を見たとしている。

山内容堂侯は予て此事を聞いて居たがぜひ一度鑑賞したいといふので京洛へ出た序でにこの旨を片野家へ申し入れた、容堂侯の肚を以てすれば兎に角一国の大名の申入れであるから早速旅舎へ持参する事であらうと思つたがなかなか然うはしない、「彼の・・・は師匠譲り門外不出の秘宝でありますから若し御覧になりたいのならば美濃まで御来車を願ひたい」とポンと持出しを断つて了つた。これには道の山内侯も大きに弱つたソコは気肌の洒落な殿様、その以前頼山陽ですらこの幅を京の三条大橋まで出迎へたいふのであるから無理もないといふので態々美濃まで此幅を拝見に出掛けて行つたと伝へられてゐる。

容堂は煎茶や盆栽を愛好したとされる人物であり、ある種の蓋然性を持っているが、明治5年に死去しているため疑問がのこる。しかも南陽が門外不出としていたため岐阜まで訪問したとしており、これも脚色の匂いが強い。

南陽は同15年に死去し、この後本作は中部地方を転々と移動した。この間の経緯について滑川の添状では「後経大垣人柘植某、半田人井口某、明治四十三年遂帰岩本君之収蔵」となっている。この柘植某は、旧大垣藩士の柘植四郎(1840～?)だろう。大垣(岐阜県大垣市)も文人趣味が流行していた土地で、大垣城代であった小原鉄心の煎茶席「無何有荘」(奥の細道むすびの地記念館)が現存している。この鉄心の娘婿が柘植四郎であり、明治維新後は東京に出て旧主君である戸田氏共の家扶をしていた。さらにその子が正岡子規の門弟の柘植惟一(潮音、1877～1935)となる。子規の日記には潮音が家蔵の中国絵画を持参していたという記述があり、柘植家に中国絵画のコレクションがあった形跡も確認できる。

次の井口某は、亀崎(愛知県半田市)の実業家であった井口半兵衛(1862～?)と断定できる。井口家に関しては、雑誌『筆の友』の大正7年(1918)7月号巻末の雑報に次の情報が見つかった。

楊文驄筆水墨山水は、志摩國鳥羽の石隠が珍蔵して居たのを山本梅逸か(ママ)手に入れ山陽だの霊華だの云つた名家の箱書をした逸品で尾州亀州亀崎の豪商井口半兵衛氏が失脚した時大阪の岩本榮之助氏が三萬八千圓で買つた井口家に在つた當時此楊文驄の一幅の爲に楊文驄の庫を建て一見したいと云つて来る人には日を期して観覧せしめたといふ程であつた

このように井口家では、専用の蔵まで作っていたのである。しかし明治40年頃より井口が役員を務める亀崎銀行の経営が傾き、本作を手放すことになる。

図7　大阪市中央公会堂

そして滑川は本作が、同43年に大阪の株式仲買人である岩本栄之助(1877～1916)に移ったと証言する。『骨董太平記』は岩本が本作を購入したのは同45年7月8日、金額は3万3500円であったとしているが、これは間違いである。岩本は同44年3月8日に父親の追善会を催しており、訪問した渋沢栄一が日記に本作を記録していた。

午前十時堺卯楼ニ抵ル、熊谷、西園寺同伴ス、岩本氏の追善会ニ列席シ、其家人親戚等ニ面会シ、陳列セル古書画及什器類ヲ一覧ス、就中楊文驄ノ画ハ頗ル名声アルモノナリ

なお岩本はこの時、私財100万円を大阪市へと寄付し、その資金で作られたのが、現在重要文化財に指定されている大阪市中央公会堂(図7)である。

本作を入手した岩本は、この時点までの外箱を解体し、漆塗りの中箱などを新調したらしい。この内箱を収納する帙には森琴石(1843～1921)による「楊龍友画江山孤亭図」の題箋が付いているが、琴石は大阪で活躍した南画家である。これは岩本が、地元大阪の文人に題箋の揮毫を依頼したということだろう。これにより「文驄山水図」などと呼ばれていた本作が、「江山孤亭図」へと改名された。そして大正2年になり、滑川が本作の来歴をまとめた添状「記楊龍文先生江山孤亭図始末」を揮毫したのである。

この前後、本作は盛んに紹介された。明治43年の兼松蘆門『竹洞と梅逸』(画報社)、翌44年の田部井鉚太郎『古今中京画』(興風書院)において、本作に関する梅逸の逸話が掲載され、大正元年の『國華』の262号でも紹介された。しかし大正5年、岩本は第一次世界大戦による株式相場の変動を読みそこね、苦境に陥った。そして同年10月22日、使用人たちを松茸狩りに出かけさせると、岩本はピストルで自殺したのである。

岩本の悲劇的な最期の後、翌6年3月6日に大阪美術倶楽部において岩本家の入札が行われた(『当市岩本氏所蔵品入札』)。本作を落札したのは七尾町(石川県七尾市)の実業家である樋爪譲太郎(1876～?)、その落札価格は実に5万円であった。同年10月26日には秋田藩佐竹家の入札会が行われ、「信実三十六歌仙」が35万3千円の高値を付けている。現在「佐竹本三十六歌仙絵」と呼ばれている作品で、重要文化財を含む37幅に分割されている。そのすべてを合わせた金額が35万円なのであり、本作がいかに高く評価されていたかがわかるだろう。

本作に付属する画冊には、永平寺貫首の日置黙仙(1847～1920)による同年4月30日の揮毫がある(図8)。

老衲本年於京都慈眼寺戒場梅逸先生揮毫畫席在今。應樋爪君之請來供養席。乃拜見楊文驄友先生之山水孤亭圖大幅。隣邦之忠士。以家門長久祈念者也。

大正六年四月三十日。

永平黙仙七十一(印)(印)

時期的に見て樋爪がこの画冊を新調したのであり、画冊や添状を収納する構造の外箱も樋爪が追加したはずである。しかし二冊組の画冊には、この後2人しか揮毫を寄せていない。この時点ですでに、北陸でも文人趣味が下火になっていた状況を物語る。

樋爪家は昭和8年(1933)5月17日に売立を行うが、落札価格は購入金額を大きく下回る1万5000円であった(『書画骨董雑誌』昭和8年7月号)。このため親引となるが、本作が重要美術品となるのは同年7月25日であった。価値を上げようという樋爪家の働きかけであろうか。なお『骨董太平記』が刊行されたのは、この間の昭和6年のことである。

そして戦後の同31年になり、樋爪家から古美術商の大久保健二が80万円で購入し、出入りしていた遠山元一に納めた。関西・中部地域の文人たちが崇拝し、神格化してきた名幅が、北陸を経て関東へと移動したのである。そこに西日本の文人趣味が、時間差で東日本に移ってきていたという状況が浮かび上がってくるのである。

以上見てきたとおり、楊文驄「江山孤亭図」に関する言説を見ると、曖昧な情報がアメーバのように増殖してきている。これらは誤情報というより、むしろ伝説を求める人々の欲求を反映したものだろう。

(依田徹)

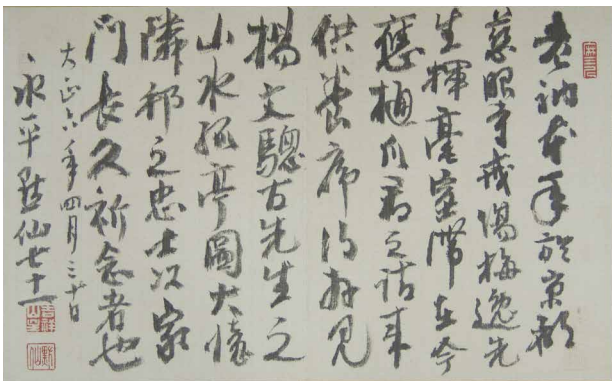


図8　付属画冊

「江山孤亭図」来歴

(鳥羽石隠)
↓
木田海東
↓
(中野龍田)
↓
山本梅逸
↓
山本梅所
↓
片野南陽
↓
(柘植四郎)
↓
井口半兵衛
↓
岩本栄之助
↓
樋爪譲太郎
↓
遠山元一

主要参考文献

兼松蘆門『竹洞と梅逸』画報社、1910

渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料 別巻 第1(日記第1)』渋沢栄一伝記資料刊行会、1966

正岡子規『子規全集 第22巻(年譜・資料)』講談社、1978

岡田為恭「騎馬絵」について

久保木彰一

はじめに

ここに紹介する岡田為恭「騎馬絵」(以下本作)は、表具されていない(まくり)12枚が巻かれた状態で遠山邸の蔵から見つかったが、創設者の遠山元一が入手した経緯などが不明のため、長らく調査もせずに未登録のままであった。今回判明した作品の内容・特徴について報告し、先学諸賢の方々からご意見を賜りたい。

次頁上段の図2のように本作は、縦131㎝、横57㎝前後の料紙の上部にたっぷりと余白を設けて、騎馬像の人馬が丁寧に著彩で描かれている。12枚のうちの右端上下2枚の右下に「以信實朝臣所圖　式部少亜菅原為恭模(菅)」(図1)の落款印章があり、筆跡は幕末の大和絵師である岡田為恭(1823～1864、冷泉為恭とも)の筆跡に問題はなく、絵も為恭の作風である。

さらに、幾重にも巻かれた包み紙中に、2枚の文書が挟まれていた。

1.「献上 騎馬繪 信實朝臣所圖模之 十二枚」
　左下破損部に菅原の菅字の残痕が残る。
2.「御萬那料」の表書き下に「公爵鷹司熙通」の小紙が貼られている。

落款と1により、本作を岡田為恭「騎馬絵」の名称にしたい。2の御萬那料とは、その年の干支生まれの皇族に、陛下からご祝儀が贈られる行事があり、本作はその賜物であったらしい。

公爵 鷹司熙通(1855～1918)は東宮武官、侍従武官を経て、大正元年(1912)9月に明治天皇大葬儀の祭官長を務め、12月に侍従長となり、同4年は卯年の年男であった。叔母と姉に伏見宮貞教親王妃がいた。大正7年に鷹司熙通は死去し、同じ年に遠山元一は独立起業しており、この時期に関係があったとは考えられないであろう。

藤原信實の騎馬絵とは

鎌倉前期に公家で似せ絵の名手であった藤原信實を筆者と伝える騎馬絵といえば、「随身庭騎絵巻」(大倉集古館蔵・国宝)があげられる。貴族の外出警護を務めた実在した近衛府武官9名を、白描の騎馬像で1巻に表す。馬具の鞦などには朱を差す。先頭で馬を牽くふくよかな2名以外の7名は騎馬人物で、両前足を上げて後ろ足立ちする馬を冷静に御している騎手の動態などが写し取られている。同じく信實作を原本と伝える本作と比較すれば、本作の騎手は随身ではなく、立烏帽子に直垂や水干袴姿の武士と思われる。また、「随身庭騎絵巻」が頭大寸胴な人馬の体型であるに対し、本作は細身の描写である。為恭が模写した原本の筆者は「随身庭騎絵巻」の絵師とは別人で、時代も後代の人であろう。

鎌倉時代以降の騎馬絵の展開

「随身庭騎絵巻」に続く騎馬絵として、馬の博物館蔵の伝土佐長隆「騎馬図巻」が12図像を収め、13世紀後半～14世紀前半の制作と推定される。それが転写されるにしたがって細部が変化し、図様の配列も変わり、別図像も追加された。多様な騎馬絵の展開については、金子岳史氏の論考に詳しい(註1)。本作親本は馬の博物館本と9図に共通性が見られる。

また、宮次男氏が紹介された土佐広周「調馬図巻」は、現在フリーア美術館の所蔵で、15世紀の作とされる(註2)。11図からなり、馬の博物館本とは7図が一致する。こちらと本作とでは、6図が似ている。

巻子以外に、1図ごとに分断されて掛軸になっているものが、国内外にいくつも確認されている。原本か写本断簡かの判別は容易でなく、伝称筆者名も異なっており、それらの系統を探るのは大変に難しい。

さて、早稲田大学図書館の「責馬之図」という作品を見つけ、本作と興味深い関係にあることがわかった。本作と「責馬之図」との親本は同じで、両者を見比べると、本作を手掛けた為恭の思いや作画態度を伺い知ることができると思われる。

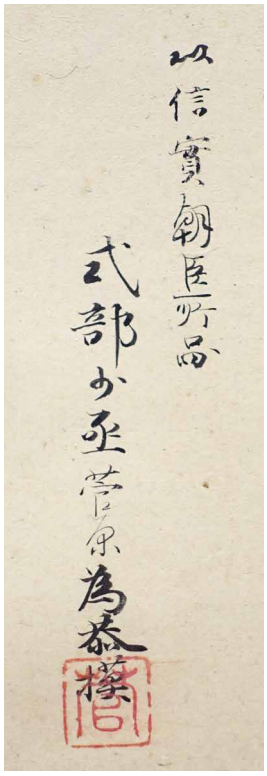
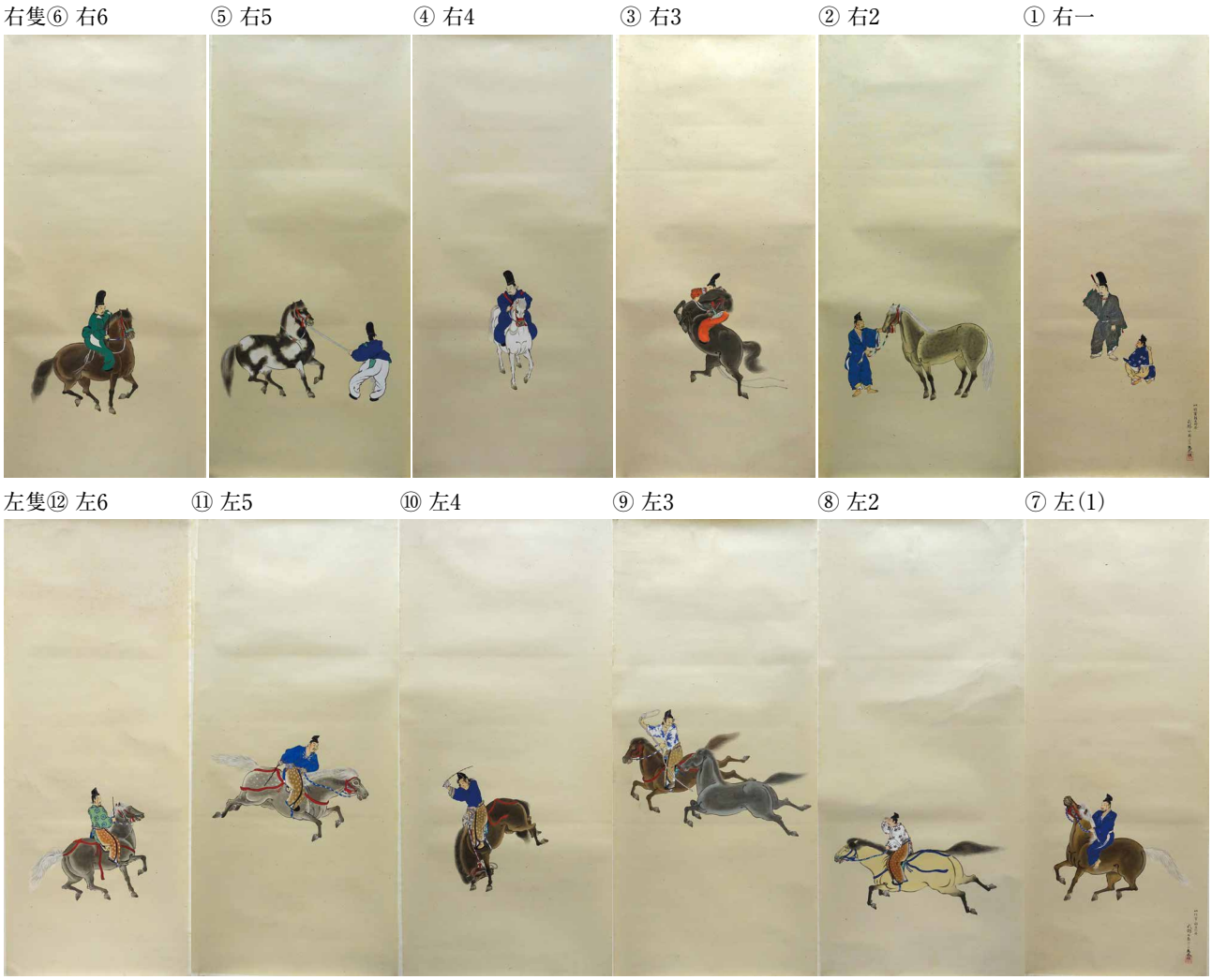


図1

図2　岡田為恭「騎馬絵」



では、本作12枚と「責馬之図」の21図からなる騎馬像を比較するための一覧表を作成したので、10〜11頁をご覧いただこう。表では本作を部分図にし、図上の①右一以下の注記は、裏打ち紙上端に鉛筆で書かれていたもの。右一〜右6、左(1)〜左6の順は、屏風の右隻第1扇から左隻第6扇の配列を示すと思われる。為恭本人ではなく、後の書入れであり、誰かが屏風に仕立てて鑑賞できるように考えていたらしい。為恭の落款は①と⑦の右下の位置となり、6曲1双の場合の①と⑫に入れる通例ではないが、注記の順に並べた。

早稲田大学蔵「責馬之図」との関係

早稲田大学図書館の古典籍／芸術／絵画

「責馬之図」藤原信実絵　円潭(写)書写年不明

(巻子装39.1×822.4cm)

責馬とは野生馬を乗馬ができるように訓練すること。書写した市原円潭(えんたん)(1817〜1901)は酒田に生まれ、15才で江戸へ出て鍛冶橋狩野家の狩野探淵の門人となり、鶴岡で出家後、幕末の京都知恩院で修業、なんと岡田為恭からも絵を学んだという。

「責馬之図」の方は巻子なので、図案集の様に図同士が接近して配される。両作品で一致する10図を見比べると、著色と白描の違いをおいて、模写の精度に驚かされる。為恭本と円潭本がお互いを写しあったように、筆線の強弱や抑揚までよく似る。自らの筆法個性を抑えた精細模写の証明であろう。両本の人馬の図像実寸は、為恭写の③右3で、騎手烏帽子の先から馬後肢左蹄まで37cmで、円潭本もほぼ近い寸法になっている。

紙幅の違う和紙を貼継いだ巻子の円潭本には、図5の右下端に「ろ」、図8「は」、図10「に」、図13「ほ」の小文字が書かれている。紙継ぎが剝がれても錯簡を生じない工夫で、前半過ぎまでは当初の形態を伝えているようである。

さて、形と色付を違えた2通りに写された本作と円潭本の親本は、おそらく騎馬図像が多い円潭本と同じ巻子本であったろう。為恭本のみにある⑧と⑪の2図も収めたものであったろうが、円潭が写した際には欠落していたのかも知れない。書写時期の前後の順は判断が難しいところだ。

岡田為恭「騎馬絵」の書写態度

円潭本の第7図（図3）は騎馬の人馬を正面から見たところで、絵を見る人の方へ進んでくるシーンになる。水干を着た乗手の右腕に「クロ上下」右足鐙（あぶみ）にも「クロ」の色指定が書かれている。なぜここだけに注記をしたのか、親本も着色されていたのだろうか。そして、鮮やかな青の水干を着る為恭の図（図4）との色違いの理由はなぜであろう。フリーア美術館本の図（図5）と共に示す。

為恭は水干を青色に描くが、円潭本には水干をクロ色と注記しており、フリーア美術館本の黒装束に一致する。為恭が写した親本では何色であったか手掛りがない。水干の袖は脇後部分で見頃と縫われるので、大きく隙ができて単（ひとえ）が見えている。

黒水干から赤の単が見える場合と、青水干から赤色がのぞかれるのとでは色彩効果が違うため、為恭が色変更をした可能性はないのか。他の相違を探ってから判断することにしよう。

下の3図の顔に注目して見比べると、為恭本だけは若く穏やかな表情をしており、右手に持つ鞭も真っすぐではなく、手元近くに捩じれのある形で、これは「随身庭騎絵巻」の先頭に描かれた人物の鞭と同じもの。円潭本では、乗り手の誰一人もこの捩じれ棒を使っていない。そして、3図から、為恭と円潭の墨線が、室町時代のフリーア美術館本よりも抑揚に豊むように引かれ、衣文の襞の陰影と、馬の胸などの筋肉の立体感が表されている。為恭の水干では、彫塗りといって線描を活かすために、線を塗り残して青色を塗る。線を際立たせるために、色がかからない丁寧な彩色法である。また、顔は微妙な表情を現わせるように細い線だけで、眉や生え際、髭は細線を書き並べている。わずか3cmほどの小さな顔を、集中して描き上げているのである。

ところで、⑧左2の騎手（図6）は馬を左方向へ走らせながら右手を額にかざして遠見をする。地に紅葉が散る模様の直垂（ひたたれ）に、鹿皮の行縢（むかばき）を穿く。

よく見ると紅葉は蜘蛛の巣にかかって宙に浮いている。為恭本は、藤原信實作と伝える鎌倉前期に遡る騎馬絵とされるが、当時の染織技法で蜘蛛の巣を表すとすれば刺繍であろうか。郎党の衣料に相応しくない。そうした繊細な模様の普及は、江戸時代中期の友禅染からである。

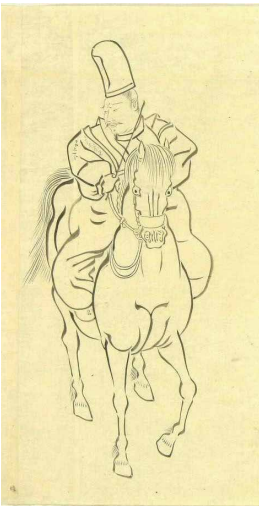


図3「責馬之図」早稲田大学図書館所蔵

図4　本作為恭本

図5「調馬図巻」フリーア美術館所蔵

Freer Gallery of Art, Smithonian F1968.72

（巻子本で、烏帽子をカットして描かれる）

続いて、⑪左5の乗り手（図7）は口をへの字に目尻を釣り上げる厳しい表情で、右方向に馬を疾走させる。この人の直垂の模様は、柵で囲った畑に薄や秋の草花が咲く風景に、竹製の鳥籠を景物として添える図で、こちらも友禅染向きである。

為恭は中世に描かれた書画や古典籍を数多く模写することで、平安鎌倉時代の貴族文化や有職（ゆうそく）を学んだが、時代錯誤を犯すとは思われない。親本に描かれる装束をそのままに模写せず、そこに当世風の面白い意匠を加味したとすれば、本作は手本を参考にしつつ、自分なりの騎馬絵にしようと考えたのであろう。

面白いことに、為恭本の⑧と⑪の2図は、円潭本にはなく、馬の博物館本にはあるので、騎馬絵初期からの存在が知られる。他10図は親本を写し、⑧と⑪は別本からの挿入かも知れない。

図6　為恭本⑧左2

図7　同⑪左5

⑦ 左(1)

折烏帽子に藍染め直垂の騎手が、手綱を引かずに馬の歩みを止める。裸足ながら、体を起こし重心を下に伝えて止めたか。①と同じく、為恭の落款あり。⬇6

⑧ 左2

楓模様の上着に鹿皮の行縢（むかばき）を穿いた騎手が、薄茶色の月毛馬を駆って疾走する。為恭写本のみの図

⑨ 左3

騎乗する額紫陽花模様上着の騎手が、並走する粕毛の裸馬を投げ縄で捕えようとするところ。⬇20

⑩ 左4

栗毛の馬は後肢を蹴り上げ、両前肢の間に首を入れる危険な前傾姿勢だが、鞦（ゆがけ・手袋）をした騎手は手綱を握り、鐙に体重をかけて冷静に制御する。⬇2

⑪ 左5

花畑模様の青い上着に行縢を穿く騎手が、馬の尻に鞭を当てて早く走る合図をして、月毛馬は速度を上げていく。為恭写本にのみの図

⑫ 左6

木瓜紋に似た模様の上着の騎手が、馬を停止させたところ。手綱を強く引かずに、体を起こして体側にわずかに肘を引いて止めたか。⬇15

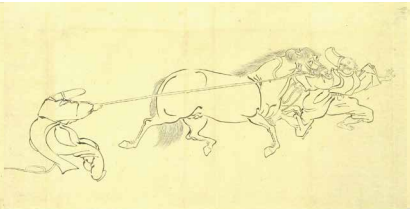
7

為恭写本④と同図柄。騎手の水干上着右肩に「クロ上下」の注記

8

右に立烏帽子水干の男、左に馬の後ろ姿

9



走る馬の前で手綱を握る男と、後ろから引き綱を引いて馬を止めようとする男の図

10

為恭写本①と同図の白描模写

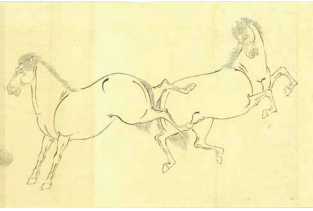
11

為恭写本②と同図の白描模写

16

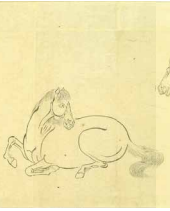
為恭写本⑥との同じ図柄の白描模写

17



二頭の馬が互いに後ろ足を蹴り上げて争っている図

18

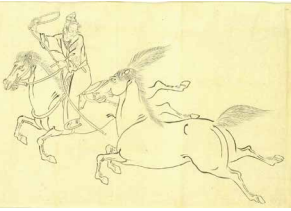


二頭の馬が地に伏して休んでいるところ。

19

こちらの二頭は左上を尻、右下に頭の斜め構図で、草を食べている図か

20



為恭写本⑨と同図の白描模写

21

親子の馬二頭が下手へ並走する図。親馬の前足先の下辺に「苔子圓潭摸（印）」落款印章がある。

遠山記念館　藤原信實「騎馬絵」岡田為恭写

① 右一

左に四替桜文上着の従者を従えた立烏帽子に大紋直垂着の武士が左を見やる。右下に「以信實朝臣所図　式部少丞菅原為恭摸（菅）」の落款印章を入れる。
⬇「責馬之図」10

② 右2

斑点のある薄墨毛馬の手綱を持つ、藍染め直垂を着る武士二人。右の立烏帽子の上位者からの指図に従っているところか。連続構図のようにも見える。
⬇11

③ 右3

派手な朱色の水干姿の騎手が、前肢を挙げて立つ竿立ちの馬を制御しようと首にしがみつく。くせ馬で反抗的か、指示に混乱したか。
⬇3

④ 右4

立烏帽子に群青色水干の騎手が白馬に乗って、ゆっくりと画面手前方向に進んでくる。
⬇7

⑤ 右5

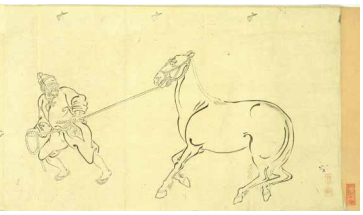
水干を白袴に入れ、脇から見える緑の上着が御洒落な侍は馬の手綱を引くが、体に大きな白斑模様の駁毛の馬は、緊張して手綱を引くほど後ずさりする。
⬇12

⑥ 右6

立烏帽子に緑色水干を着た武士が、栃栗毛の馬に騎乗する。馬は安定した歩み。
⬇16

早稲田大学図書館所蔵　藤原信実「責馬之図」円潭写

1



引き馬図。水干男は強く引き綱を引き、馬は抵抗する。

2

為恭写本⑩と同図の白描模写

3

為恭写本③と同図の白描模写

4

2と似た馬の前傾姿勢で、騎手は馬の首に逆さにしがみつく。

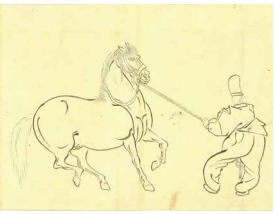
5

立烏帽子に水干着の騎手が後を振り返り、馬を急停止させる。

6

為恭写本⑦と同図の白描模写

12



為恭写本⑤と同図の白描模写

13

立烏帽子水干の男が馬の横に並び、左手は馬口元の手綱を、右手は残りの綱をもつ

14

前と似た図柄で、人物は別人、人馬の位置は同じでも顔は逆向き。

15

為恭写本⑫と同じ図柄の白描模写

早稲田大学図書館の古典籍総合データベース（Web）で、全図が公開されている。

先述した為恭の青色水干に戻って、馬の博物館本で上衣袴は黒、フリーア美術館本も黒だが、為恭が写した親本も黒であったとは限らない。為恭作品の色付けは、手本で絵具の発色が鈍くなっていれば、元の色に復元して塗った可能性もあろう。さらに、他本にはない馬体の色や模様も、為恭の改変の可能性が高い。

屏風仕立ての可能性

はじめに触れたように、未表具12枚の本作に縦寸法の差はないが、鉛筆注記の①右一、⑦左（1）、⑫左6の3枚は、6cmほど横幅が短く、屏風に仕立てる際の両端の位置にあう紙幅になっている。

8頁上に示した12図の配列は、鉛筆注記を加えた人物の発想なのか、そこには以下のような分別が読み解ける。

右隻：調教前、途中の馬具なしの裸馬。立烏帽子をつける上位の武士が多い

左隻：⑦以外は胸懸（むながい）、鞦（しりがい）をつける調教済の馬に、折烏帽子の騎手は行縢（むかばき）を穿く。円潭本にない2騎が加わる

このように、右隻、左隻では、完全ではないものの調教段階の違いで区分けされている。しかも、左隻の⑨左3と⑪左5の騎馬は、料紙下辺に配置する他の4枚とは変えて、上に引き上げて描いている。これは為恭本人が屏風設計に順って位置を決めた構図であったに違いない。こうすることで、右隻は静的で安定した様子にする。左隻は疾走する騎馬3騎が奥行きを違えた空間を駆けぬける、動的な構図としたのだろう。

騎馬絵の作例の多くは、巻子に様々な人馬の姿態を、背景なしの図鑑のように連続して描かれた。馬を巧みに乗りこなす人への憧憬、馬術の手引き書、馬が走る図像手本として繰り返し写され、近世初期には長谷川等伯「牧馬図屏風」（東京国立博物館）のように、山野に遊ぶ馬、調教する武士を挿入する作品も描かれるようになる。

では、為恭の思いを仮想してみることにしよう。

この騎馬絵の手本は高名な藤原信實の作だから、格調高いその魅力を損ねないよう、屏風の背景なしの空間に人馬を配して、そこに見る人の視線が集中するようにしたい。

全図に一連の物語を加味させることは無理だが、最初の二扇はこんなところか。

右隻一扇に立つ一族の長（おさ）棟梁（図8）は、扇子を額にかざしながら、二扇で手綱をもつ郎党に向け、責馬（せめうま）の仕方について指示をする。

薄墨毛に班紋の馬、今はおとなしいが、急に荒れ馬になるやもしれぬ。用心いたせ、と。

躍動する人馬の周りには、祭りにも似る高揚した空気が漂っている。

ただ、春の夜の走馬燈のごとし。

最後に、「虫狩（むしがり）」と題した為恭の別作品（図9）と比較してみたい。虫狩は平安貴族の初秋の風雅な遊びで、嵯峨野周辺で姿と音色の良い鈴虫や松虫を探して宮廷に献上した。虫の音を競わせる虫合わせも行われた。野原で紙燭の明りをたよりに草むらを探す下仕えの左に立つ貴族が、扇子でそこにいると伝える。その容姿が上の棟梁とよく似ている。ふっくらした頬、ゆったりした着装、扇子の仕種も似たもの同士に見える。

公家や上級武家の男性、宮廷の女房を描く時には為恭好みの表現パターンは決まっていて、顔の微妙な表情や仕草、持ち物や着物の模様を使って、人物の性格が現れるようにしたようである。

図8　同①右一

図9　岡田為恭「虫狩図」（部分）
落款の官位から安政2～5年の32～35歳作
遠山記念館蔵

註1　金子岳史「永青文庫所蔵《調馬図屏風》についての一考察－作品の紹介および「騎馬図巻」との関係－」『熊本県立美術館研究紀要』第13号、2013年3月
騎馬図巻の諸本、成立と展開、近世絵画への波及についても詳しく論考される。

註2　宮次男「調馬図巻」『古美術』第20号、1967年
現在のフリーア美術館本調馬図巻を初めて紹介された。

2025年度 後期 展覧会

特別展「中国絵画への憧憬 ―楊文驄「江山孤亭図」と江戸時代の文人たち―」

10月4日（土）～11月16日（日）

明王朝の遺臣として清王朝と最後まで戦った楊文驄（龍友、1597～1646）は、日本においては武士道と重ね合わされて受容され、またその生きざまから文人たちの敬意を集めることになりました。特に遠山記念館の所蔵する「江山孤亭図」は、名古屋の山本梅逸（1783～1856）が家財を売り払って購入し、京都の頼山陽（1780～1832）がこの作品を出迎える際に裃を着けたという伝説を持ちます。実際に「江山孤亭図」には山陽の箱書があり、この他にも各時代の文人たちによる賛の付いた数々の付属品が添っています。「江山孤亭図」は文人たちの信仰対象であったとさえ言えるでしょう。本展ではこの「江山孤亭図」をはじめとする日本国内の楊文驄の作品を集めるとともに、それを受容した梅逸、山陽などの作品をならべ、この近世南画史の一面を浮かび上がらせることを試みます。

楊文驄「江山孤亭図」1643年

山本梅逸「青緑桃源図」1839年

岡田半江「春靄起鴉図」
1841年
重要文化財

「中国絵画への憧憬―楊文驄「江山孤亭図」と江戸時代の文人たち―」関連イベント

- **特別講座「楊文驄の亡国と芸術―その幕末明治への残響―」**
  10月18日（土）午後1:30～午後3:00　　講師:宮崎法子氏（実践女子大学名誉教授）
- **特別講座「関東南画の展開とその影響」**
  11月　1日（土）午後1:30～午後3:00　　講師:村田隆志氏（大阪国際大学教授）

会場：遠山記念館事務棟大会議室　　**参加費：**500円（入館料別途）
定員：各回80名（先着順、Zoom参加可能）　**お申込み方法：**当館公式サイト申込みコーナーから

コレクション展２

2026年
11月29日（土）～1月18日（日）

年末から年始にかけてのコレクション展です。遠山記念館の所蔵品の中から、新年の干支である馬を象った木彫作品である米原雲海「馬」、合戦絵の名品「源平武者絵」、そして、初公開となる岡田為恭「騎馬絵」（7頁参照）など、馬に関連する作品を展示します。さらに、「松竹梅鶴亀模様白綸子地打掛」など正月をお祝いするのにふさわしい染織品や工芸作品を選んで紹介します。

「源平武者絵」（部分）
江戸時代前期　17世紀

「松竹梅鶴亀模様白綸子地打掛」
江戸時代後期　19世紀

米原雲海「馬」　明治末～大正頃　20世紀

テーマ展「雛の世界」

2月7日（土）～3月15日（日）

江戸期には人形文化が開花し、独自の雛人形を母体に多彩な人形が登場しました。立雛、享保雛、古今雛、芥子雛や近代の名工たちの作品のほか、今回は「子どもと遊び」をテーマにして子どもたちの愛玩した人形や玩具類を紹介します。あわせて遠山邸の大広間では、恒例の遠山家の雛壇飾りと共に、今回は、新たにご寄贈いただいた明治･大正･昭和時代の雛段飾りも展示します。邸宅内に4組ものお雛様を飾るのは、初めての試みです。例年以上に華やかで、賑わいを増した遠山記念館の雛祭りをお楽しみください。

「立雛（次郎左衛門頭）」
江戸時代中期～後期　18～19世紀

「犬張り子」 明治時代　19～20世紀

・「雛祭りの日」ガイドツアー
日時：2月21日（土）、2月28日（土）、3月1日（日）
午後1:30～3:00
会場：美術館･遠山邸
参加費：無料（入館料別途）

当日午後1時30分に美術館ロビーに集合、担当学芸員が「雛の世界」展と「遠山邸」を解説します。

テーマ展「茶道具と床飾り」

3月28日（土）～5月10日（日）

室町時代、書院造りの成立とともに、足利将軍家周辺で床の間に掛軸や香炉を飾り付ける作法も定められていきました。本展では遠山記念館の所蔵品の中から徳川将軍家伝来の大名物である「文琳茶入　銘　玉垣」をはじめ、長次郎作の「黒楽茶碗　銘　巌」などの茶道具の優品を選んで展示いたします。また関連する床飾りの美術品として、明智光秀が所持したという伝承を持つ「青磁香炉　銘　浦千鳥」、「菊蒔絵硯箱」などもご覧いただきます。

「文琳茶入　銘　玉垣」
中国　南宋～元時代　13～14 世紀

「青磁香炉　銘　浦千鳥」
龍泉窯（中国）　南宋時代　12～13世紀

長次郎「黒楽茶碗　銘　巌」
桃山時代　16世紀

これからの催し物

遠山邸2階公開日

日時：9月20日（土）、10月13日（月･祝）
午前11:00～午後3:00

参加費：無料（入館料別途）

通常非公開の遠山邸2階をご覧いただけます。昭和初期の雰囲気が色濃く漂う和洋折衷の応接室を中心に、庭園を一望できる14畳の座敷など見どころがいっぱいです。

2024年度　催事報告

5月11日（土）特別講座「源氏物語と美術―お伽草子から垣間見る―」
講師：上野友愛氏（サントリー美術館主任学芸員）
10月12日（土）特別講演会「コプト時代の社会と人々の暮らし」
講師：辻村純代氏（古代学協会客員研究員）
10月19日（土）特別講演会「コプト織―文様とシンボルの饗宴―」
講師：加藤磨珠枝氏（立教大学教授）
2025年
2月 1日（土）地域子ども教室「投扇興遊びと子どものためのギャラリートーク」（共催:川島町教育委員会）
2月22日（土）、3月1日（土）・2日（日）「雛祭りの日ガイドツアー」

●遠山家雛壇飾り　2026年2月7日（土）～3月15日（日）

雛祭りの季節に合わせ、遠山邸の大広間で十畳の座敷いっぱいに飾られた雛壇飾りをご覧いただきます。これは遠山元一が、長女貞子（大正9年生まれ）の初節句の祝いとして揃えたもので、京都御所の紫宸殿風の館に人形を飾る「御殿飾り」と、関東風の「段飾り」との二組で構成されています。「御殿飾り」は檜の樹皮で屋根を葺いた檜皮葺きで、すべて組み立て式になっており、また「段飾り」は七段で、特に五人囃子と随身には日本橋十軒店の名工「永徳斎」の商標が付いています。

遠山家雛壇飾り 御殿飾り

●ご来館のみなさまへ●

感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

・倦怠感、発熱、咳などの症状のある方は、ご来館をお控えください。
・アルコール消毒液にご協力をお願いします。
・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってください。
・作品、展示ケース、壁や柱などにはお手を触れないでください。

利 用 案 内

◇入館料

	一　般	学　生
特別展	1,000円	800円
通　常	800円	600円
展示替期間	600円	400円

※中学生以下は無料、団体20名以上は**2割引き**

◇開　館　午前10:00～午後4:30（入館は午後4:00まで）
◇休館日　月曜日（月曜が祝日の場合は翌日）
12月21日（日）～2026年1月4日（日）
2月5日（木）～6日（金）、3月17日（火）

◇展示替期間（邸宅、庭園のみ公開）
11月18日（火）～11月28日（金）
2026年 1月20日（火）～ 2月 4日（水）
3月18日（水）～ 3月27日（金）

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。
URL https://www.e-kinenkan.com

電車・バスでのご来館の場合
●東武東上線・JR埼京線　川越駅
●西武新宿線　本川越駅　●JR高崎線　桶川駅
いずれも「川越駅－桶川駅」間の東武バスで
牛ヶ谷戸（うしがやと）下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合
●圏央道川島ICより7分
●川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより　第69号　2025年9月発行
編集発行　公益財団法人 遠山記念館　〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675
編集担当　依田　徹　TEL：049-297-0007　FAX：049-297-6951